

# 天馬の記

岡部耕大

③

猛暑の夏、クーラーもない稽古場で稽古をしての帰りの満員電車の中のことである。帽子をかぶったわたしは、汗を拭きながら吊り革に掴まっていた。前の席に座って、単行本を読んでいる女の人がいた。わたし

ことを考えている。女の人はちらちらとわたしを見ると、すつと席から立ち上がり「どうぞ」と席を譲ろうとした。よっぽど疲れた顔をしていたのだろう。「いや、いいんです」。あた、一人、にやにやと笑いながらメールをしていた。どんなメ

人はぎろつとわたしを睨んだ。「わたしのメールを覗かないで」。睨んだ目がそういつていた。「おまえのメールなんか覗きたくもない」といつてやりたかった。が、いつたらいつたで「この人痴漢です」と訴えられても困る。確かに、痴漢と訴えられた人には冤罪の人もいるのかもしれない。ただ、同情はわたしよりは確実に女の人に集まるはずである。女は涙を武器にする。「あいつなら、やりかねん」。いまは両手で吊り革に掴まっている。

## 老いて諦めを知る

は単行本を読んでいる女の人が好きである。「まだ日本も大丈夫だ」。なんだか頼もしくなる。

験である。うれしくもあり、悲しくもあった。女の人は周囲を気味な光景である。なんとなく見回して「どうよ」と得意気な女の人の方に目をやると、女の

老いとは諦めを知ることかもしれない。老いは忍び寄る。老いはじわじわと忍び寄る。

わたしには人をじっと見つめる悪い癖がある。観察しているわけでもない。ただ、じっと見つめる悪い癖である。頭は別の



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

(松浦市出身)

映画「まあだだよ」にも時代と人間に決別した黒澤明がいた。老いとは残酷である。闘争心をなくして仏心が生まれる。スタップも旧知のイエスマンだけを集める。老いは醜態であるといつてもいい。戦いを忘れた人は歌を忘れたカナリアよりも劣る。「志 死ぬまで果たして志」

もう7、8年も前の話である。